

明治初期、宮城県の学事関係文書にみる女子教育と裁縫科の設置（その一）

高野 俊

はじめに

周知のように、明治五年の「学制」は、四民平等、男女共通教育を指示したが、当時の民衆の生活実態や生活意識からくる女子教育に対する見かたや期待から余りにもかけ離れていたこと、および強制的な行政措置への反発や批判から女子の就学率は極めて低かった。そのため女子教育振興策として、女児小学の開設や裁縫科の設置など特別の措置がとられたのである。それは反面では「学制」の理念たる男女共通教育の原則を実際的に崩すことになり、いわゆる「裁縫」が女子固有の教科に定着していく端緒となって、その後の男女差別の教育と深い関わりをもっていくことになる。

従来の女子教育（史）研究においては、この時期、すなわち明

治五年から明治十年代までの女子教育の実態、とりわけ女児小学や裁縫科の実態について全国的規模で詳細に調査した先行研究は皆無であった。筆者はこれまで、この研究の足掛りとして、千葉県下の女児小学と裁縫教育の調査研究を続けてきた。それらの結果は極めて不十分ではあるが、「明治初期の女子教育と千葉県の裁縫教育」（『和洋女子大学紀要』第二十四集、一九八三年）と、「明治初期千葉県の女児小学と裁縫科の設置」（『日本教育史研究』第三号、一九八四年）にまとめられ、さらに一九八六年の教育史学会第三〇回大会、翌年の三一回大会で発表を続けてきた。それらの学会発表の内容は、「明治初期千葉県の女児小学——女児小学規定と設立状況——」（『和洋女子大学紀要』第三十一集、一九九一年）に、その一部をまとめて発表している。また、一九九一年の教育史学会第三五回大会では、女児小

学設置の全国的実態を明らかにするため、主に「文部省年報」に依って調査・分析した結果を報告した。

千葉県について多くの課題が残されている点は自覚しながらも、女児小学と裁縫科に関する実態調査が全国的には未解明である点を踏まえて、今回は宮城県が明治九年から十二年にかけて女子教育の振興策として導入した裁縫科の設置状況を、主として宮城県立図書館所蔵の県庁学事関係文書、約五十冊を精査することで明らかにしようと試みたのである。

宮城県では当時、千葉の渡辺辰五郎と並び称された近代裁縫教育の先駆者・朴沢三代治が存在し、県の裁縫教育仮規則の制定や裁縫教員の養成に積極的に関与していることもあり、ここでの裁縫教育の開始と展開がもっている歴史的意義を明らかにしたいと意図しているが、千葉県下の事例との比較研究は今後の課題として、本稿では、とりあえず、宮城県における裁縫教育の開始・展開に関する重要な史料を簡単な解説を加えて紹介することにした。

宮城県の裁縫教育についての先行研究には、千葉昌弘氏の論文、「明治初期宮城県の女子教育と(初代)朴沢三代治」(『仙台大学紀要』第八集、一九七六年)がある。この論文は宮城県学事関係文書や文部省年報に基づいて記述されているが、なおこれら資料の全体的活用という点では不十分さがあり、また裁縫

教育開始の先鞭をつけた仙台の培根小学校の建言書と裁縫科仮規則、次いで県当局が明治十年七月に布達した「裁縫科仮規則」については、その存在を指摘するにとどまっている。

前述したように、今回の調査により、千葉県の事例では必ずしも明確でない点を明らかにする多くの史料が発見された。例えば各小学校の裁縫科設立の意図、各校独自の仮教則、裁縫課程、裁縫科教員の人撰・任命の状況、生徒の人数と年齢などである。また別に分類されるべき未就学女子のための「裁縫科設立願」や「娼妓教育授産誘導之建白」等の史料も発見されたのである。これら諸史料の分析から裁縫科の設置・展開内容を具体的に知り得ることができたので、一九九二年度の教育史学会第三六回大会において、「近代初頭、小学校教育における裁縫科の設置と展開に関する一研究——宮城県下を事例として——」のテーマで発表を行なった。

今回、これら多量の史料を全て掲載することは到底無理なので、まず(その一)として、裁縫教育が開始された明治九年六月から県の仮教則が布達された十年七月までの設置状況に限って、簡単な解説付きで紹介することにした。

以下、史料の内容により大きく三つに分類した形で史料の原文そのものを列挙していくことにする。その三分類とは次の通りである。

①宮城県における裁縫教育の嚆矢——培根小学校（史料①⑤）

②琢玉小学校の裁縫科設置と県の仮教則制定との関連——朴

沢三代治の関与（史料⑥⑨）

③県の仮教則発布までの設置状況の特徴——各校独自の仮

教則制定（史料⑩⑰）

資料 宮城県下の裁縫科設置状況一覧

設置願伺 年・月・日	小学校名（学区・所在地）	教則・規則の制定
明治 九・六 八・八	培根 小学校（第二学区仙台北町通）	裁縫科仮教則（一〇・六・三）
〇・三 〇・四 〇・五	琢玉 小学校（第二学区宮城郡七北田村）	裁縫科教授規則
〇・四 〇・五 〇・六	富田 小学校（第二学区宮城郡黒川村）	裁縫科教授規則
〇・四 〇・五 〇・六	塩釜 小学校（第二学区宮城郡塩釜村）	裁縫科教授規則
〇・六 〇・七 〇・八	黒澤 小学校（第二学区加美郡黒澤村）	裁縫科教授規則
〇・六 〇・七 〇・八	第三学区 深谷小学校より「縫織設立（縫織科仮教則）」出願	裁縫課業表
〇・七 〇・八 〇・九	諄誘 小学校（第四学区玉造郡若山山） （県当局より「裁縫科仮教則（規則）」布達）	裁縫課業表
〇・七 〇・八 〇・九	中新田 小学校（第四学区加美郡中新田村）	布達の仮教則に照準する
〇・七 〇・八 〇・九	廣瀨 小学校（第三学区黒川郡廣瀨村）	
〇・七 〇・八 〇・九	鶴崎 小学校（第三学区黒川郡鶴崎村）	
〇・七 〇・八 〇・九	小堤 小学校（第三学区黒川郡小堤村）	
〇・七 〇・八 〇・九	鹿又 小学校（第三学区黒川郡鹿又村）	
〇・七 〇・八 〇・九	糟川 小学校（第三学区黒川郡糟川村）	
〇・七 〇・八 〇・九	山崎 小学校（第三学区黒川郡山崎村）	
〇・七 〇・八 〇・九	白石 小学校（第三学区黒川郡白石村）	
〇・七 〇・八 〇・九	第三学区本吉郡より「小学校開設の儀」（裁縫科）出願	
一・一 一・二 一・三	上谷 小学校（第三学区宮城郡上谷村）	
一・一 一・二 一・三	須静 小学校（第三学区宮城郡須静村）	

〈史料紹介〉明治初期、宮城県の学事関係文書にみる女子教育と裁縫科の設置（高野）

一・三・三	増田 小学校（第二学区宮城郡増田村）	裁縫科教授規則
一・三・三	根白石 小学校（第二学区宮城郡根白石村）	裁縫科教授規則
一・三・三	福岡 小学校（第二学区宮城郡福岡村）	裁縫科教授規則
一・三・三	愛子 小学校（第二学区宮城郡愛子村）	裁縫科教授規則
一・三・三	弘道 小学校（第二学区宮城郡弘道村）	裁縫科教授規則
一・三・三	小野 小学校（第二学区宮城郡小野村）	裁縫科教授規則
一・三・三	廣才 小学校（第二学区志田郡廣才村）	裁縫科教授規則
一・三・三	租税課等外二等出仕 塩澤武より 「婚姻教育授産誘導之儀建白書」（変則女子教則・裁縫科教則）出願	
一・三・三	宮床 小学校（第二学区黒川郡宮床村）	裁縫科教授規則
一・三・三	馬場 小学校（第二学区遠田郡馬場村）	裁縫科教授規則
一・三・三	知類 小学校（第二学区仙台北町通）	裁縫科教授規則
一・三・三	気仙沼 小学校（第二学区本吉郡気仙沼村）	裁縫科教授規則
一・三・三	金山 小学校（第二学区伊具郡金山村）	裁縫科教授規則
一・三・三	芋澤 小学校（第二学区宮城郡芋澤村）	裁縫科教授規則
一・三・三	荒田 小学校（第二学区伊具郡荒田村）	裁縫科教授規則
一・三・三	山王 小学校（第二学区宮城郡山王村）	裁縫科教授規則
一・三・三	名取郡公立小学校教則審科 授業時間ハ本科授業時間外ニ於テス	
一・三・三	黒川郡・加美郡小学校教則 授業時間ハ本科授業時間外ニ於テス	
一・三・三	但シ裁縫ハ課業時間外トス	
一・三・三	宮城郡公立各小学校教則 授業時間ハ本科授業時間外ニ於テス	
一・三・三	各教科課程授業時間ト合シテ六時間ヲ超ヘサル様致度候	
一・三・三	桃生郡公立小学校規則（附録裁縫科） 授業時間ハ本科授業時間外ニ於テス	
一・三・三	毎級必ス試験ヲ施シ格ニ合フ者ハ卒業證書ヲ授与シ格ニ合ハサ ル者ハ元級ニ止ムルヲ法トス	
一・三・三	修業時間ハ各級適宜タルヘシト雖可及的本課時間外ニ授クルヲ 法トス	
一・三・三	登米郡公立小学校教則 授業時間ハ本科授業時間外ニ於テス	
一・三・三	但裁縫ハ課業時間外 トス	
一・三・三	仕鹿郡公立小学校教則 授業時間ハ本科授業時間外ニ於テス	
一・三・三	裁縫女子ノ為メニ裁縫ノ一科ヲ置キ授業時間ハ一時間トス	

この後、県の仮教則に照準して裁縫科を設置した小学校が十二年五月までの間に二七校も存在するが(一覽表参照)、これらの史料は(その二)として紹介したいと考えている。尚、今回調査した史料に基づいて作成した「宮城県下の裁縫科設置状況一覽表」を参照までに掲げておきたい。

史料解説

①宮城県における裁縫教育の嚆矢——培根小学校

〈史料①〉 培根小学校に裁縫科設置

宮城県における裁縫教育の開始は、明治九年(一八七六)六月、仙台の培根小学校が独自の「裁縫科仮教則」を定め試みに施行したのがその最初である。裁縫科設立の趣旨は「学制」の女児小学規定に則り、女児の教育には裁縫科を設けるのが適切であるとして、十歳以上の者に裁縫の基本を授けようとするものである。「裁縫科仮教則」では科目を六級に分け毎級五か月間の習業とし、毎級卒業の者は試験を経て昇級、習業時間は正課後の一日二時間と定め、その分の正課時間を短縮して四時間としている。裁縫内容は第六級の運針・解き物から始まり、木綿の単衣・袷・絮入^{わたいいれ}の実物仕立て、さらに二級・一級では紬物、絹帛、袴、帯等の縫い方まで段階的に習得させるように配慮し

ている。

〈史料②〉 培根小学校の裁縫教師雇伺

〈史料③〉 培根小学校の裁縫教員辞令

裁縫科設置に伴う裁縫教員の雇入れについては、県当局にとっても困窮をきわめる問題であり、適当な教員がみつからなために設置不可能な学校も多かった。培根小学校では裁縫科開設時から十年三月までの十か月間、本校助教の新妻龍代が兼務していたが、正課授業との兼合いが難しくなり、代りに伊庭いさ(三十三才)を採用している。伊庭は本校生徒係兼世話掛の妻で、「一通之単衣仕物モ出来教授モ相応行届」というのが推挙の理由である。給料は本課授業料の内から月々五拾錢、外に裁縫生の授業料より志次第の金額を足し加えるとしている。

史料③は十一年四月に学区取締と区長の連名で提出した裁縫教員辞令伺書である。同該区の時習小学校の教員人撰に関わる部分も記載されてあるが省略した。培根小学校では、十一年四月になって裁縫科生徒が六十余名に増加したため二組を増し都合三組となった。従つて二名の教員が必要だが、今のところ白極りやう一名のみを採用するとしている。白極は一年間、校費をもつて仙台師範学校の裁縫科に入校し朴沢三代治の下で伝習した者である。残る一名の教員不足は当分の間、当生徒が手伝つ

て間に合わせていきたいと願っている。朴沢が裁縫教員の養成と派遣に関与している事実と、学校および学区担当者が裁縫教員の確保に苦慮している様子がうかがわれる史料である。

〈史料④〉 培根小学校の概要

この記録は明治十一年に書かれたものである。本校は明治六年七月二四日、仙台北六番丁に四番小学校として開校、初代校長は矢野成文で、生徒数二一名であった。同九年四月には木町通北四番丁に校舎を新築し培根小学校と雅称した。史料のごとく、十一年には生徒数五四九人に増え、その内女生徒数一七八名、教員数二十名という大規模校である。裁縫科生徒は十歳以上を対象とし、五級から八級まで合せて六九名在籍している。

〈史料⑤〉 培根小学校の変則裁縫科上申

明治十一年九月、培根小学校三等訓導、若生精一郎は学区取締と連名で当時の県権令宮城時亮に対し、変則裁縫科設置の請願書を提出した。若生は在職中から民権運動に関わりをもった教師であるが、当時、女子の不就学の多い原因が、家庭の貧困や他人の家に雇われて子守などの労働に従事せざるを得ない状況にあるとして、そのような女子が児を負ったままで裁縫科に來学でき、また放課後、修身・育児法・養生法・珠算等を無月

謝で教授する旨上申している。

以上、培根小学校の裁縫科設置と展開について概説してきたが、この先駆的施行がモデルとなり契機となって、以後、県下仙台および各郡部の小学校においても次々と設置の動きがみられるようになったのである。

① 琢玉小学校の裁縫科設置と県の仮教則制定との関連

—— 朴沢三代治の関与

〈史料⑥〉 琢玉小学校に裁縫科設置

培根小学校に次いで裁縫教育を始めたのは、朴沢三代治がその開設当初から裁縫専務の助教として関わった仙台の琢玉小学校である。裁縫科は九年八月に仮設置されたが、その後「生徒多数二相成教授方法も稍其當を得るべきと之を相為」として、十年六月、「裁縫科仮教則」を定め県の認可を得るべく上申している。

培根小学校の教則と大きく異なる点は、科目を八級とし毎級六か月の修業であること、裁縫の科目内容がかなり計画的で、羽織・夜具・帷子・小児帯・男女帯・巻物類まで含む高度な技術を習得させようと試みていることである。これは「袴帯専門」の仕立師である朴沢の実践から考案された教授内容であった。

〈史料⑦〉 裁縫科仮教則認可及布達

この史料に見るごとく、琢玉小学校の上申が認可された十年七月に、県達の「裁縫科仮教則」が布達されたが、それは琢玉小学校が届出した教則をそのまま援用したものであった。この事実は新しい発見である。培根・琢玉小学校を初めとして後掲する塩釜・黒澤・諄誘小学校等においても裁縫科設立がみられると、県当局もこの動向と要求に対応せざるを得なくなった。一応文部省に稟議し、その指揮を得たので挙行するとして、まずもって繁盛の場所より取り設けていく方針を示している。以後、各校において裁縫科を設置する場合はこれに照準すること、また既に設立の学校もこれに照準し、地方の事情によって変更する場合や教員・経費等の儀については伺いを経て着手するようにと指示している。

〈史料⑧〉 琢玉小学校の裁縫教員辞令伺

朴沢三代治は、仕立師の技術と裁縫教育の実践者としての経験が認められ、十年八月から仙台師範学校の裁縫科教師に招かれている。それゆえ琢玉小学校では補佐役として兼務することになり、その後任として、これまで手伝ってきた弟子の甲田みとりを助教に昇格させ、大石こしほを助教補に推薦している。次いで十年十二月には、高弟甲田みとりを師範学校に抜擢する

と、大石こしほを助教に昇格させ、同校生徒の姉、小梨はま(十三才)を助教補として起用しているのである。

これら琢玉小学校の裁縫教員の動きと採用に朴沢が私塾の門下生を送っていた事実と、裁縫科設立来、補助役として指導誘掖に努めた形跡をみる事ができよう。

〈史料⑨〉 琢玉小学校の概要

この記録は明治十一年に書かれたものである。本校は明治六年七月七日に仙台の七番小学校として開校、九年四月には琢玉小学校と改称されている。児童数二七二名、八学級編成の規模であったが、史料にみられるように、十一年には児童数が三七〇名に増え、その内女生徒数は一七四名、教員は校長の矢吹薫を始め二〇余名の大規模校である。裁縫科生徒は十歳以上を対象とし、四級から八級まで合せて四一名在籍している。裁縫担当教員が兼務二名、専務者二名在職したことは他校にはみられない事実である。

これら琢玉小学校における裁縫教育の実際は、県当局がその施策に積極的に取り組む直接の契機となり裁縫教育全体の進展に多大な影響と貢献とを与えたものといえよう。前述した朴沢の関与と功績についても、これまであまり正確には知られていないことである。

③県の仮教則発布までの設置状況の特徴

——各校独自での仮教則制定

〈資料⑩〉 塩釜小学校に裁縫豫科設置

明治十年に入ると各校独自で「裁縫仮教則」を定めて裁縫科を設置する学校が現われる。第二中学区宮城郡の塩釜小学校では、十年四月九日付けで「裁縫豫科」の設置を願い出ている。その設置事由として、裁縫が女子にとって緊要のものであり、生徒の父兄のみならず其の他多くの民衆も希望していること、また、女子の就学者が増えれば学校が一層盛大になると上申している。裁縫教員の月給は当分一円とし女生徒の授業料と教員一統より資を加えて支給すること、授業時間は正課後の二時間と定めている。「裁縫授業規則」では八級から一級とし、素縫運針から始め一級の袴仕立までの授業内容となっている。この内容は培根・琢玉小学校のそれは多少異なり両者を折衷したように思えるものであり、培根小学校の内容を一タイプ、琢玉小学校を二タイプとすれば、塩釜小学校の内容は三タイプとして分類できる。

〈史料⑪〉 塩釜小学校変則裁縫入校願

この史料は十一年九月、十一・十三・十六歳の学齡超過女子四名が、裁縫のみの専門生、つまり変則裁縫生として入校した

い旨、証人としての保護者名で塩釜小学校に願い出たものである。

〈史料⑫〉 塩釜小学校の概要

この記録は明治十一年に書かれたものである。生徒数と教員数のみを掲げた簡単な記録で概要の多くを知ることができない。塩釜小学校の生徒数は下等生のみ百九十一名、うち男が百五十六名、女三十五名であるが、裁縫科生徒数は記載されていない。前掲史料の四名のみであるのか不明であるが、裁縫科専務教員（准助教）の橋本みよしが在職している。

〈史料⑬〉 黒澤小学校に裁縫豫科設置

塩釜小学校に続き、第四中学区加美郡の黒澤小学校でも、十年四月二十八日付で「裁縫豫科」の設置を願い出ている。在籍女兒十五名のために裁縫豫科を設けたく、本校世話掛の妻、錦戸ヨネズ（二十三才）を裁縫専務の助教補に任命している。「裁縫豫科教授手續」の内容は塩釜小学校の「裁縫授業規則」と全く同じであり、明らかに参考にして定めたものとわかる。

〈史料⑭〉 黒澤小学校の新築願

黒澤小学校では明治十年、学区内有志金約二百五十円をもつ

て校舎を新築したき旨願ひ出ている。学校の教員、村扱・戸長はじめ有志の人々も賛同・協力しての大事業である。別紙の「図」では、四教場の外に裁縫場が設けられている。新築の校舎に裁縫場を設置した例として宮城県下では最も早いものであると思われる。

〈史料⑮〉 諄誘小学校に裁縫科設置

第四中学区玉造郡の岩出山村、諄誘小学校では十年七月六日付けで、裁縫科設置と裁縫科助教補、伊達波那の人撰について上申した。上申書に添付した「裁縫課業表」は、提出六日後の七月十二日に認可される。諄誘小学校独自で定めた裁縫規則では、科目を六級に分け毎級四か月間の習業、毎級卒業者は試験を経て昇級、習業時間は一日二時間と定めている。課目内容を見ると六級から四級までは培根小学校の教則と同様であるが、三級から一級までは巻物類・比翼仕立を加えるなど多少の違いがある。

〈史料⑯〉 諄誘小学校の概要

この記録は明治十一年のものである。諄誘小学校当時の生徒数は二百五十二名、その内男子が百七十四名、女子が七十八名、上等生は八級に男子九名のみである。女子は下等生中七級・八

級に集中し、上級になる程少なくなり四級以上は一人も在籍していない。尚、裁縫科生徒は五級八名、六級十八名、七級六名、八級十名で計四十二名である。教員五名の内裁縫科専務の伊達なみが記されている。

以上、十年七月に県の仮教則が發布されるまでの間に、各校独自での教則をもって裁縫科設置を試みた塩釜・黒澤・諄誘小学校について概説した。これらは女子教育の振興のために女子の就学促進策として裁縫科に積極的に取り組んだ事例である。このような設置の動きが、裁縫教育に対する県当局の積極的な関わりを促したことはいうまでもないことである。

〈史料⑰〉 第三中学区深谷小学区の縫織科設立願

県の仮教則制定までの動きの中で更に注目されるのは、明治十年六月廿三日、中学区取締真田幸敏と区長志賀慶二の連名をもって上申した、第三中学区深谷小学区の縫織科設立願である。設立の趣旨は、学区中の学齢女兒の内、就学しない者が多く特に僻地の婦女子は文字を学ぶことも裁縫を習うこともないのが田家の通常である。今、僻地寒村まで小学校が設立されたのに乗じ、また第七大学区教育会議の「裁縫を教える方法」の議決に応じて学区内の毎校に女紅場を設け裁縫を教授したいというものである。その方法は、まず該区廣淵小学区中に女紅場を新

築すべき協議がなされたが民力未だ到らないため、小学校の空
場を営繕して裁縫科を設置する。担当教員は該校助教の根本得
子を当て、これを模範として各校へ押し広めていけば女兒の入
校も日に日に促進されるであろうとの目算である。

「縫織科仮規則」をみると、課目は第八級から第一級、教授
内容は裁縫の基本的知識と技術の習得から始まり、毛織・絹・
縮緬まで含む実物の仕立方を計画的・段階的に配置している。
授業時間は毎日二時間とし、毎級六か月、試験の上昇級、全科
卒業満四か年と定めている。裁縫生は満九年の女生徒をもつて
八級生とするが特別優等の者、年齢規定外の生徒は規則によつ
て束縛しないものとしている。この裁縫内容や規則からみて、
小学校における裁縫教育の範囲を超え、授産を目的とする女紅
場的な施設であつたように思われる。しかし、これだけ周到に
計画された規則・内容であつたが、十年八月に設置された廣瀨
小学校の裁縫教育では十分に展開することができなかったと推
察される。

原文史料

〈史料①〉 培根小学校に裁縫科設置

(明治九年「小学校関係綴」学務課)

(欄外)「七十五」

参事⑩

廳下培根小学校ニ裁縫ノ科ヲ設ケ女兒十年以上ノ者ヲ擇ヒ正課
ノ外裁縫ノ端緒ヲ教授致度教則相添訓導伺出申候裁縫ハ女子ノ
不可欠モノニテ学制ニモ相出居候間御聞届可相成哉今回ノ義ハ
試設置ノ事ニ候間文部省御伺等ニ及間敷哉ト御指令案相伺
書面伺之趣聞届候事

培根小学校へ裁縫仮教則ヲ設ケ度願書

女兒ノ教育ニ裁縫ノ科ヲ設クル適切ノ義ニ可有之尤学制第廿六
章ニモ女兒小学ハ尋常小学教科ノ外ニ女兒ノ手藝ヲ教フルノ明
文モ有之候ニ付依テ當校助教新妻瀧代ニ命シ各級ノ女生徒十歳
已上ノ者ヲ擇ヒ正課ノ外薄カ裁縫ノ端緒ヲ授ケシメ度候處右教
則無之候テハ授業ノ手續差支候ニ付先以當校丈別冊ノ教則ヲ設
ケ當分試ミ施行致度候間御詮議ノ上御指令被成下度奉願候以上

明治九年六月

培根小学校三等訓導

若生精一郎⑩

学区取締

富田 協平⑩

区長学区取締兼務

氏家 次章⑩

宮城縣權令宮城時亮 殿

裁縫仮教則

一 科目ヲ六級ニ分ツ毎級五ヶ月間ノ習業ト定ム但シ期月ハ生徒該藝ノ進否ニヨリテ伸縮

増減モ有ルベシ

一 習業ノ時間ハ一日二時間ト定メ正課時間ノ後ニ置クベシ但シ但

正課ヲ縮メテ四時間トス

一 該科ヲ授クル必ズ満十歳以上ノ者トス

一 課目中要處ヲ授クル必ズ懇切ニ口授スベシ

一 毎級卒業ノ者ハ試験ヲ經テ昇級セシメ落第ノ者ハ原級ニ止

ムルヲ法トス

一 教場ハ本来ノ教場ヲ用フ机並ニ椅子共別ニ教場ヲ設クルヲ

要セズ

但シ正課時間ノ後ニ在レハ敢テ妨ナシ亦机並ニ椅子ヲ用フル西洋各國ノ風ニ倣フ

一 教師ハ當分當校助教新妻瀧代ヲ用フ給料ハ受業料マツノ内ヨリ

一 圓ヲ増加ス

但シ他日盛大ニ至ル事務ノ教員ヲ擇バサルヲ得ス

一 器械鍼具ハ生徒各携フ者トシ豫テ具ヘ設クルヲ要セズ

課目

第六級

一 鍼ハコビ 解キ物

第五級

一 木綿単衣ノ背脇縫方

第四級

一 木綿単衣総仕上ゲ

第三級

一 木綿衿並ニ木綿ノ縫ヒ法

第二級

一 木綿絮入并紬物ヲ縫ハシム

第一級

一 絹帛絮入ノ類并袴帶等縫ヒ方

以上

明治九年六月

培根小学校

〔史料②〕

培根小学校の裁縫教師雇伺

(明治十年「教員進退上申綴」学務課)

第二中学区培根小学校助教申付候事

但裁縫教授専勤申付候事

十年六月二七日

培根小学校裁縫教師雇伺

第二大区八小区木町通
二十五番学校地居住

土族勝之助父隱居
培根小学校生徒係兼世話掛

伊庭昌実妻

伊庭いさ

三十三年十月

右同人當校裁縫教師ニ雇入申候去年六月中伺之上正課時間之後
ニ於テ女兒裁縫教則ヲ設ケ助教新妻たきよヲ以為御扱置候處同
人義ハ本科授業相兼候ニ付授業専心難致當三月以來ハ右伊庭い
さヲシテ教授為致相試候處生徒之手藝モ逐日進歩當々ニ至リ一
通之単衣仕物候輩モ出来教授振モ相応行届候者ニ付如此御届候
給料之儀ハ當分本科受業料之内ヨリ月々金五拾錢外ニ裁縫生徒
ヨリ志次第多少之受業料其之外之分ヲ足加支給仕候右御聞置被
成下度此段上申仕候也

同校三等訓導

明治十年六月廿日

若生精一郎[㊞]

学区取締

富田 協平[㊞]

宮城縣權令宮城時亮 殿

〈史料③〉 培根小学校の裁縫教員辞令伺

(明治十一年「教員進退綴」学務課)

(欄外)「百五十」

權令[㊞]

教員御辞令案伺

宮城縣土族
誠一姉

白極りやう

培根小学校准助教裁縫科専勤申付候事
但月給金壹円五拾錢被下候

教員人撰

同七小区木町末無
土族誠一姉

白極りやう

三十三年六月

右ハ培根小学校^{マツ}準助教裁縫専勤ニ被成下

月給壹圓五拾錢被下置度候

右之通御採用被成下度候當今生徒増加授業行届兼候等別紙之通
両学校(時習小学校省略)ヨリ申出候間相副此段上申仕候以上

学区取締

明治十一年四月二日

富田 協平[㊞]

区長

氏家 次章^⑨

宮城縣權令宮城時亮 殿

培根小学校教員二名被附下度願

第二大区七小区末町末無
士族職一師

白極りやう

三十三年六月

右ハ去年十月以來該校費ヲ以仙台師範學校裁縫教師朴澤三代

治ヘ随從同科傳習引讀該校教授手傳随居候者ニ候

(前略)右之内後一名ハ裁縫科助教ニ被附候度奉願候同科生徒是亦追々人数増當時六十餘名ニ相成ニタ組ヲ増シ都合三組ニ分割在来之助教一名者ハ教授行届兼候ニ付如此奉願候右被附下候而も尚一ト組ノ教員不足之分ハ當分當生手傳ヲ以間ニ合候様可仕下伺何分之御詮議ヲ以尋伺右兩名(丹野一名省略)被附下度此段奉願候也

培根小学校三等訓導

明治十一年三月

若生精一郎^⑩

〔史料④〕 培根小学校の概要

(明治十一年「官省上申綴」学務課)

培根小学校

第七大学区第二中学区第四小学区
宮城郡仙臺末町通

開校明治六年七月廿四日

一生徒五百四十九名 内男三百七十一名
女百七十八名

一上等生 六級男 十人

一下等生 一級男十八人 二級男廿五人
一級女一人 二級女二人

四級男十八人 五級男廿一人
四級女六人 五級女十五人

六級男七人 七級男四十六人
六級女廿七人 七級女十九人

八級男百六十三人
八級女百八十八人

一裁縫科生徒 六十九人

五級十三人 六級十五人

七級二十六人 八級十五人

一教員 三等訓導 若生精一郎
月給金十六円

四等訓導 白極 誠一
同 金十三円

五等訓導 佐藤 時彦
同 金十円

一等權訓導 矢野 成文
同 金八円

三等權訓導 上田弥三郎
同 金六円

同 別所已七郎

四等權訓導 丹野 景貞
同 金五円

五等權訓導 横尾喜民治
同 金四円

同 佐藤郁二郎

同同 鈴木 綱助

助教 七人内 裁縫専務一人 月給金二円ツツ

準助教二人内 裁縫専務一人 同 金卍円五十銭ツツ

一生徒掛兼世話掛 伊庭 昌言

一学区取締 第二大区六小
小田原山本丁 富田 協平

一資金八百三拾八円四銭七厘

一一ヶ月経費百十六円

一受業料金拾七円

一仙臺ノ内七小学区ニ分畫シ第四小学区ノ為ニ設ク

一戸數千六百二十一戸

一人口七千四百三十四人

一通学里程ノ遠キハ九二十丁

一教場十五

〈史料⑤〉 培根小学校の変則裁縫科上申

(明治十二年「雜記綴」学務課)

方今教育ノ盛ナルヤ概ネ不就学ノ児ナシト雖ドモ貧家糊口ニ
困シム幼若ノ女子ノ如キハ惟学ニ就ク能ハザルノミナラス他

ノ家ニ雇ハレテ子守リト称シ終日人ノ嬰兒ヲ背ニシ無技文盲
ニ長スルコト誠ニ以憫然ノ至ニ候仍テ此等ノ徒ハ志願次第其
児ヲ負ヒタル儘裁縫ノ科へ来学ヲ許シ無月謝ニテ教授致シ終
課ノ後更ニ席ヲ設ケ教員更ル更ル居残り修身ノ話及育児法養
生談珠算或ハ容易キ帳合法及簡略ナル日用文等ヲ授ケ申候間
御聞置被下度此段上申仕候也

培根小学校三等訓導

明治十一年九月十八日

若生精一郎 印

学区取締

富田 協平 印

宮城縣令松平正直 殿

〈史料⑥〉 琢玉小学校に裁縫科設置

(明治十年「官省上申綴」学務課)

琢玉小学校ニ而昨九年八月より裁縫科相立置候處追々生徒多
數ニ相成教授方法も稍其當を得忝派之学科を相為候ニ付自今
官令を以該科設立被成下候様仕度奉存候仮教則別冊之通学制
仕候間尚御詮議被成下早速御指揮相成度此条上請仕候也

琢玉小学校訓導

十年六月廿八日

矢吹 薫[㊟]

学区取締

富田 協平[㊟]

宮城縣權令宮城時亮 殿

裁縫科仮教則

一裁縫科ハ正科女生徒滿十歳以上ノ者ヲシテ此ニ入ラシムル
ヲ法トス

一科目ヲ分テ八級トシ毎級六箇月間ノ修業ト定メ四年ニシテ
卒業セシムル者トス

一毎級ノ終リ試験ヲ經テ昇級セシムヘシ

一修業ハ一日二時間ト定メ午後二時三十分ヨリ四時三十分ニ
至ル

科目

第八級

一素縫 一直線縫

第七級

一単物 一木綿小兒帶

第六級

一木綿袷 一木綿絮入

第五級

一洗張 一補綴

第四級

一木綿羽織 一夜具

一袴

第三級

一絹紬羽織 一男女帶

一小物

第二級

一木綿袷 一絹紬絮入

一帷子

第一級

一卷物袷 一卷物絮入

一卷物男女帶

〈史料⑦〉 裁縫科仮教則認可及布達

(明治十年「官省上申綴」学務課)

(欄外朱書)「官省上申済七月三日達」[第十一]

權令[㊟]

小学校女生徒へ裁縫教授之義新夕之事ニテ規則整備不致候ニ付

是迄ハ本課外ニ致置候処弥盛大ニ向候間設科設立致度旨琢玉小
学校より届出申候教則之義ニ候間一応文部省に稟議之上相定メ
可然哉案取調相伺候

右之通每校無遺漏可相達候也

明治十年七月

宮城県権令宮城時亮 殿

(朱書)「甲第貳百七十四号」

裁縫科仮教則

小学校^五裁縫科取設之義ニ付伺

当県尋常小学校女生徒へ裁縫科ヲ取設ケ教授致度別紙之通仮教

則取調候処一応御指揮ヲ得奉行仕度此段相伺候尤毎校一時ニ取

設候義ハ出来兼候ニ付繁盛之場所ヨリ漸ヲ以取設ケ申度且科目

中實際ニ涉リ不便宜之義も有之候ハハ改正致候見込ニ付以仮教

則ヲ設申候間此段も上申候也

宮城県権令宮城時亮 殿

明治十年七月

科目

第八級

権令^⑨

一素縫

一直線縫

大書記官^⑩

第七級

達案

一単物

一木綿小児帶

小学校ニヲイテ裁縫科取設候仮教則別紙ノ通相定候条既ニ取設

候分トモ右ニ照準可致候且右教授ヲ本課時間へ組入又ハ地方適

宜ヲ以變更致度者ハ伺ヲ經可取計候尤新ニ裁縫科ノ取設候分ハ

教員並ニ經費等ノ義伺ノ上着手候義ト可相心得候

第六級

一木綿衿

一木綿絮入

第五級

一洗張

一補綴

第四級

一木綿羽織 一夜具

第三級

一絹紬羽織 一男女帯

第二級

一絹紬袷 一絹紬綿入

第一級

一卷物類袷 一卷物類絮入

一卷物類女帯

〈史料⑧〉 琢玉小学校の裁縫教員辞令伺

(明治十年「教員進退上申綴」学務課)

(欄外)「二百六十五」

大書記官㊤

御辞令相伺

第二中学区琢玉小学校
助教補

甲田みとり

助教申付候事

但裁縫科教授専務今迄之通

宮城県士族
勝長之長女

大石こしほ

第二中学区琢玉小学校助教補申付候事

但裁縫科教授専務申被下候事

八月二十一日

琢玉小学校助教補
裁縫科専勤

甲田みとり

士族勝長長女

大石こしほ

二十五年一ヶ月

右琢玉小学校裁縫科助教朴澤^{マツ}已代治仙臺師範学校本務被申付候
ニ付甲田みとり儀助教被申付右添助教補大石こしほ^江被申付度
尚御詮議之上早速拜命相成候様被成下度此条上請仕候也

琢玉小学校訓導

十年八月廿一日

矢吹 薫㊤

学区取締

富田協平㊤

区長代理戸長

守屋成憲㊤

宮城縣権命宮城時亮 殿

(欄外)「四百二十一」

大書記官[㊟]

御辞令案伺

琢玉小学校助教補
裁縫科専勤

大石こしほ

助教申付候事

宮城縣士族
清之節

小梨 はま

第二中学区琢玉小学校助教補申付候事

但裁縫教授専勤申付候

明治十年十二月六日

琢玉小学校助教補
裁縫科専勤

大石こしほ

右助教被申付度候事

第二大区六小区百駿町十九番地
同校生徒士族清之節

小梨 はま

十三年八月

右助教補裁縫科専勤被申付度候事

琢玉小学校裁縫科教員朴澤^{マツ}已代治甲田みとり仙台師範学校より

兼務ニ而隔日交番致し居候處該校教授行届兼隔日出頭致し難き

趣申出候ニ付前条之通拝命相成候様被成下度此条上請仕候也

琢玉小学校訓等

十年十二月六日

矢吹 薫[㊟]

学区取締

富田協平[㊟]

宮城縣權令宮城時亮 殿

〈史料⑨〉 琢玉小学校の概要

(明治十一年「官省上申綴」学務課)

琢玉小学校

第七大学区第二中学区第七小学区
宮城郡仙臺立町

開校明治六年七月七日

一生徒三百七十名 内男百九十六名
女百七十四名

一上等生 八級 男六人

一下等生 二級 男十人 女四人 四級 男十八人 女十八人

五級 男十八人 女十一人 六級 男二十一人 女十一人

七級 男十五人 女二十人 八級 男百一十五人 女七十七人

一裁縫科生徒 四十二人

四級八人 五級五人

六級八人 七級八人

八級十三人

〈史料紹介〉明治初期、宮城県の学事関係文書にみる女子教育と裁縫科の設置(高野)

一教員

校長
師範学校教師兼

矢吹 薫

三等訓導
月給金十六円

松岡 太愿

五等訓導
同 金十円

西大條 規

一等權訓導
同 金八円

岩淵仙之助

三等權訓導
同 金六円

木村定之助

五等權訓導
同 金四円

芦立三十郎

助教 七人内

一名裁縫専務
二名師範学校兼
月給金二円ツツ

新山 定慶

武内 繁晴

天野 右門

準助教二人

月給金壹円五十錢ツツ

浦口茂太郎

高橋 栄次

石井 直武

助教補一人

月給金壹円五十錢ツツ

松岡 哉郎

裁縫専務

朴沢三代治

甲田みとり

大石こしほ

小梨 はま

一世話掛

宮本源右衛門

一学区取締

富田 協平

〈史料⑩〉

塩釜小学校に裁縫豫科設置

(明治十年「願伺指令綴」学務課)

裁縫豫科差置度伺

今般第廿九小学区塩釜小学校に裁縫豫科別紙授業規則書ノ通差
置度候最モ裁縫之儀ハ女工中緊要之者ニ有之候処當地方生徒ノ
父兄ハ不及申其他ノ人民モ希望仕候在衆多有之候景況ニ相見得
右豫科差置候ヘハ学校一層ノ盛大ニモ在至リ可申ト教員一統會
議仕候上右豫科差置度候間此段奉伺候也
但シ裁縫教員ノ儀ハ女学生授業料ト教員一統ヨリ益加ヘ一ケ
月金壹圓ノ割者當分相差置候次ニ授業時間ノ義ハ小学課業時
間後二時間ト相定メ授業為仕候也

四等訓導

明治十年四月九日

田邊 希臣

学区取締

富田 協平

宮城縣權令宮城時亮 殿

裁縫授業規則

八級 七級 六級 五級

素縫針運 単衣仕立 袷仕立 綿入仕立

四級 三級 二級 一級

羽織仕立 洗張仕立 綴物等 袴仕立

宮城縣第二大区十二小区塩釜村
二百五十八番地吉川千吉妹

吉川タイ女

當十六年

右学歳超過候ニ付裁縫専門ニ入学奉願候御校則可令確守候也

証人

明治十一年九月

吉川千吉㊟

塩釜小学校 御中

〈史料⑪〉

塩釜小学校変則裁縫入校願

(明治十一年「願伺指令綴」学務課)

変則裁縫入校願

宮城縣第二大区十二小区塩釜村
七十七番地阿部桂之助三女

阿部キメ女

当十三年六ヶ月

変則裁縫入校願

宮城縣第二大区十二小区塩釜村
四百五十八番地佐藤嘉七三女

佐藤マサ女

當十三年十月

右学歳超過候ニ付裁縫専門入校奉願候御校則之儀ハ可令確守候也

証人

右学歳超過候ニ付裁縫専門ニ入校奉願候御校則之儀ハ可令確守候也

明治十一年十一月十八日

阿部桂之助㊟

証人

明治十一年九月

佐藤嘉七㊟

塩釜小学校 御中

変則裁縫入校願

宮城縣第二大区十二小区塩釜村
八十一番地浅野リツ女長孫

浅野キク女

変則裁縫入校願

〈史料紹介〉明治初期、宮城県の学事関係文書にみる女子教育と裁縫科の設置（高野）

当十一年三ヶ月

右学歳超過候二付裁縫専門入校奉願候御校則之儀ハ可令確守候也

証人

明治十一年十一月廿日 浅野リツ女^印

〈史料⑫〉 塩釜小学校の概要

(明治十一年「官省上申綴」学務課)

塩釜小学校

一生徒百九十一名 男百五十六名
女三十五名

下等生 一級 男十八名 二級 男六名

四級 男十二名
女三名 五級 男二十名
女四名

六級 男十四名 七級 男十一名
女四名

八級 男七十五名
女二十名

一教員 四等訓導 田邊希臣

一等権訓導 橋本清賢

鎌田孝次郎

助教 置原茂吉

鈴木養八

〈史料⑬〉 黒澤小学校に裁縫豫科設置

(明治十年「教員進退上申綴」学務課)

第四中学区第五十四黒澤小学校助教補拜命奉願書

第三大区小十三区黒澤村五十六番地
黒澤小学校世話掛土族高義家

錦戸ヨネ寿^印

当明治十年四月
二十三年八ヶ月

當校生徒百名余之内女兒拾五名有之教授餘間裁縫之科ヲ設ケ教授為仕度御差支無之候ハハ右ヨネズ助教補ニ被命候様仕度同人義者兼而行状モ正シク相應之人柄ニ候間早速御詮議被成下度此段上申仕候以上

米沢文治

准助教 小池源次郎

裁縫科専務 橋本みよし

一世話掛

大宮施次

一学区取締

前同

三等訓導 木村可行^印

明治十年四月廿八日 村扱 小濱利武^印

戸長 横田 磨^印

中学区取締 伊藤文吾 印
 区长 境野明寛 印

宮城縣権令宮城時亮 殿

裁縫豫科教授手續

八級 七級

一 素縫針運 一 単衣仕立

六級 五級

一 拾仕立 一 綿入仕立

四級 三級

一 羽織仕立 一 洗張仕立

二級 一級

一 綴物等 一 袴仕立

教授時間

一 小学課業時間後二時間ト定候

一 教員給料ハ授業料ヨリ相渡候

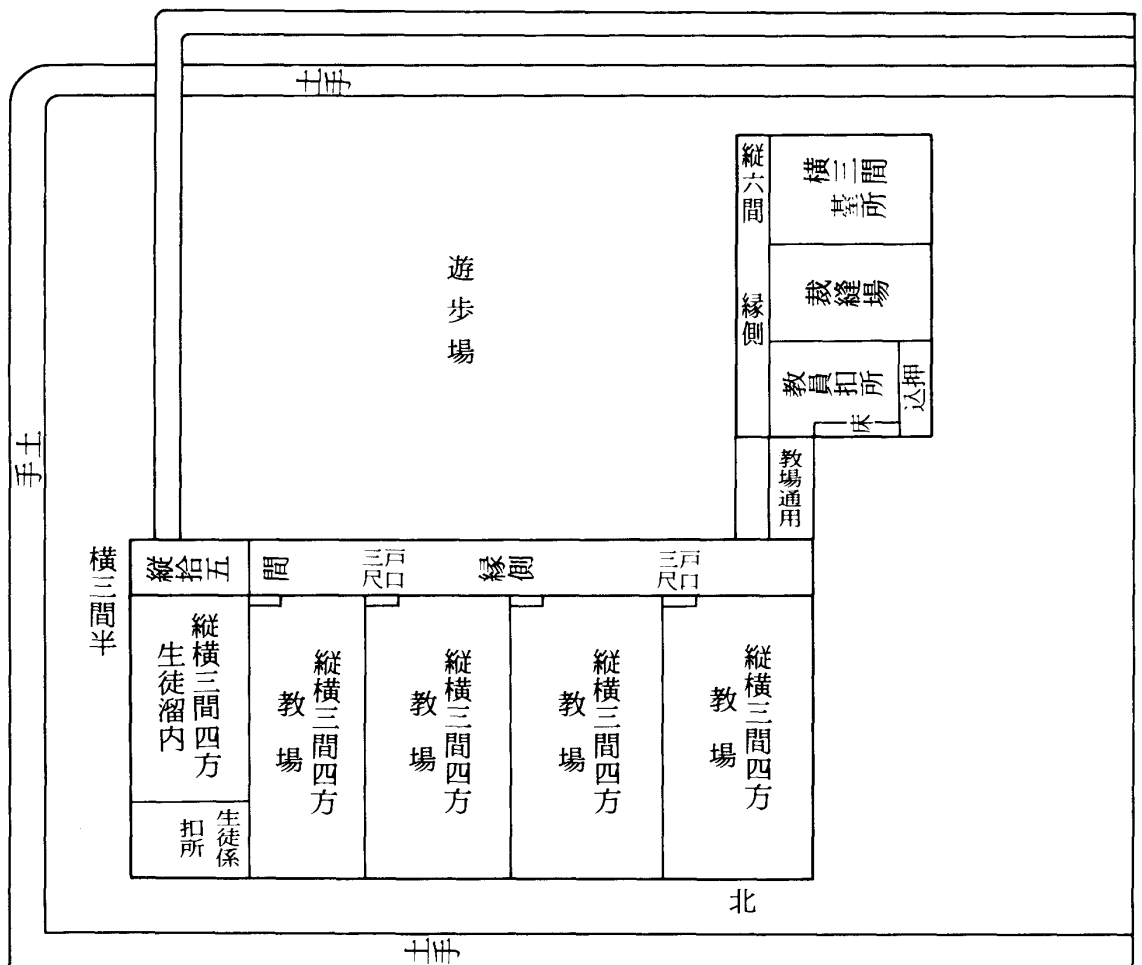
以上

明治十年五月 黒澤小学校

〈史料⑭〉 黒澤小学校の新築願

〈史料紹介〉 明治初期、宮城県の子事関係文書にみる女子教育と裁縫科の設置（高野）

第五十四黒澤小学校の図



(明治十年「願同指令綴」学務課)

第四中学区第五十四黒澤小学校新築願

第三大区小十三区加美郡黒澤小学校同村西福寺^江仮ニ設置候処別紙廉縛図面之地所学区内中央ニテ最寄モ宜場所ニ在之教員共ヘモ協議之上学区内有志金ヲ以同村山崎吉右衛門荒畑借受新築仕度奉願候費用ハ概略金貳百五拾円程相掛候積ニ候得共多少之増減モ可在之候間悉替落成之上明細取調上申可仕候早速御詮議御聞済御指令被成下度私共連署ヲ以此段奉願候以上

黒澤小学校
世話係

飯淵厚知^印

黒澤小学校
世話係村扱補

錦戸高義^印

村扱

小濱利武^印

戸長

横田 磨

取締被出役被奉
代理村扱

相澤崑七郎

中学区取締

伊藤文吾

区長

境野明寛

宮城縣権令宮城時亮 殿

第四中学区諄誘小学校

裁縫科取設候ニ付課業表取調差出候處当分取調之通ヲ以教授不苦候全試之義ハ文部省稟議中ニ候間追而相達候義可尽之候為心得候此段相奉候也

明治十年七月 宮城縣権令

七月十二日

裁縫課助教補人撰上申書

第三大区十小区玉造郡
岩出山村農

伊達波那

四十五年一月

諄誘小学校裁縫課相設正科教授之後ニ女学生教授為仕度御差支無之候ハバ右波那助教補ニ被命候様御詮議被成下度別紙裁縫教則表相副此段上申仕候以上

諄誘小学校在勤
二等權訓導

阿部孫四郎^印

明治十年七月六日

諄誘小学校在勤
四等權訓導

伊藤 祐^印

戸長

倉 辻造^印

中学区取締

伊藤文吾^印

区長

境野明寛^印

〔史料⑮〕

諄誘小学校に裁縫科設置

(明治十年「教員進退上申綴」学務課)

宮城縣権令宮城時亮 殿

裁縫課業表

明治十年七月六日

諄誘小学校

一科目ヲ六級ニ分チ每級四箇月間ノ習業トス

但生徒手業ノ進否ニヨリテ伸縮アルヘシ

一習業時間ハ一日二時間トス

但正課教授時間ノ後ニ於テス

一每級卒業ノ者ハ試験ヲ歷テ昇級セシメ落第ノモノハ仍ホ其級

ニ止マルヲ法トス

課目

○第六級

一鍼ハコヒ解キモノ

○第五級

一木綿単衣ノ背及腋縫^{アキヌ}ヒ方

○第四級

一木綿単衣総仕上ケ

○第三級

一木綿衿綿入レノ縫ヒ方及ヒ衣服ノ裁チ方

○第二級

一絹紬ノ衿綿入及ヒ其他羽織袴ノ裁チ縫ヒ

○第一級

一絹紬及ヒ丸巻物類ノ衣服帶等ノ裁チ縫ヒ及ヒ比翼仕立ニ至ル

以上

〈史料⑬〉 諄誘小学校の概要

(明治十一年「官省上申綴」学務課)

諄誘小学校

一生徒貳百五十二名

男百七十四名
女七十八名

上等生 八級 男九名

下等生 二級 男一名

四級 男四名

五級 男二十九名
女六名

六級 男三十二名

七級 男二十九名
女十三名

八級 男六十名
女十七名

裁縫科 五級八名 六級十八名

七級六名 八級十名

一教員 四等訓導 伊藤 祐

三等權訓導 阿部孫四郎

准助教 芳賀昌治

上野源七郎

裁縫科専務 伊達なみ

一世話掛 小原保臣

一学区取締

前同

史料⑰ 第三中学区深谷小学区の縫織科設立願

(明治十年「願伺指令綴」学務課)

縫織科設立願

第三中学深谷小学区中学齡ノ学ニ就カサル寡トセス女兒者最多
キニ居ル僻地ノ頑愚學問ノ何物タルヲ了覚セス婦女子ノ如キハ
曾テ文字ヲ学ハシムル者ナク甚シキハ品行ニ害アルヲ云ヒ真ニ
無用ノ物ナリト云ニ至ル紡縫ト雖ドモ学ハシメス長ジテ父夫ノ
衣服ヲ裁縫スル克ハス他人ニ囑托シテ耻ル色ナシ是田家ノ通常
ナリ僻地寒村迄小学ノ教至ラサルナシ此期會ニ乘シテ女兒ノ教
方ヲ設ケスンハ玉疵ノ患ト言ハサルヲ得ス已ニ第七大学区教育
會議ニ女兒十歳以上必裁縫ヲ教ユル方法五条ノ議決アリ故ニ私
擔当学区内毎校女教場ヲ設ケ裁縫ヲ教ヘシメ其父母ニ小学ノ實
学タル女子モ学ハサレハ能ハサルヲ親ク見聞セシメ感激奮発ノ
心ヲ生セシメ度巡回ノ都度々々里老有志ヘ説諭候処四十四廣瀨
小学区中女教場新築ノ協議ヲ起スト雖ドモ民力未到ル故ニ小学
校中ノ空場ヲ營繕シ不日開業為仕度候該校助教根本得子女ハ裁
縫ノ道ニモ熟シ居候ニ付教師ト仕右ヲ模範トシ各校ヘ押擴メ候

者ハ女兒ト雖トモ學齡ノ者日ニ入校ノ見込候際仮ニ相立候
教則書相副奉上申候条届御異儀候ハハ至急御聞届被成下度者也

明治十年六月廿三日

中学区取締

真田幸欽

区長

志賀慶二⑱

宮城縣權令宮城時亮 殿

裁織科假規則

第八級

針ノ種類名目及ヒ持チ方運^{ウツ}逾方等ヲ教ヘ次ニ缺ノ扱ヒ方縫絲
ノ區別古ル着ノ解キ方等ヲ授ケ兼テ些少ノ物品ヲ縫ハシム

第七級

衣服ノ種類名目及ヒ疊ミ方^{羽織袴ヲ除ク}ヲ教ヘ次ニ蒲團及單服ノ背筋
両腋等ヲ縫ハシメ兼テ針留ノ仕方仕付ケ掛方等ヲ授ク

第六級

綿服衿衽ノ附方及ヒ袖袂等ノ縫方ヲ教ヘ兼テ木綿糸ノ紡キ方
ヲ授ク

第五級

羽織袴ノ疊方及ヒ袖口裳尾ノ縫方ヲ教ヘ次ニ綿服衿衣ノ合セ
方續衣ノ綿ノ入レ方等ヲ授ク

第四級

男女木綿帶ノ合縫方及ヒ羽織衣着衾等ノ仕立方足袋股服袴ノ裁方ヲ授ク

第三級

苧麻ノ績ミ方絹布単服ノ仕立方及ヒ足袋股服袴ノ縫方ヲ授ク

第二級

廣幅布毛織物絹縮緬等ノ裁縫スヘキ通常一切ノ針功ヲ終ヘシ

ム

第一級

生糸ノ取方及真綿ノ掛ケ方紬ノ抽キ方及ヒ木綿機ノ仕掛ト縫方等ヲ授ク

○

絹機綾織袋仕立式服器械縫等ハ上等ノ学科ニ譲リ爰ニ除ク

特別優等ノ者及ヒ年齡定規外ノ生徒ハ固ヨリ規則ヲ以テ束縛ス

ヘカラス教師ノ意ニ任スト雖ドモ概略其標準ヲ立ル左ノ如シ

○

第一章

受業時間毎日二時間トス即チ午後第三時ニ始メ五時ニ終ル

第二章

休暇日曜日ヲ以テス

第三章

満九年ノ女生徒ヲ以テ第八級生トス

第四章

毎級卒業満六ヶ月試験ノ上昇級セシム

第五章

全科卒業満四ヶ年トス

全科試験卒業ノ後上等ニ昇級セシム

〈付記〉

本調査研究にあたっては、宮城県立図書館の郷土資料室の皆様、手厚いお世話をいただきました。特記して感謝の意を表します。

(本学助教授)